

## 目次

1	凸錐と凸多面錐	2
2	凸多面錐の演算	4
2.1	ベクトルが凸多面錐に含まれるか否かの判定	5
2.2	凸多面錐の簡単化	6
2.3	双方向不等式制約の検出	6
3	凸多面錐の変換	8
3.1	真錐	8
3.2	真凸多面錐の face 形式から span 形式への変換	10
3.3	凸多面錐の変換アルゴリズム	12
4	連立一次不等式	14
	問題	16

# 1 凸錐と凸多面錐

集合  $C$  の任意の要素  $\mathbf{x}$  に対して

$$\alpha \mathbf{x} \in C, \quad \forall \alpha \geq 0 \tag{1}$$

が成り立つとき、集合  $C$  を錐 (cone) とよぶ。集合  $C$  に含まれる任意の要素  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  に対して、 $\mathbf{x}$  と  $\mathbf{y}$  を結ぶ線分上の任意の点が  $C$  に含まれるとき、集合  $C$  は凸集合であるという。錐  $C$  が凸集合であるとき、 $C$  を凸錐 (convex cone) とよぶ。集合  $C$  が凸錐であるための必要十分条件は

$$\alpha \mathbf{x} + \beta \mathbf{y} \in C, \quad \forall \alpha, \beta \geq 0, \quad \forall \mathbf{x}, \mathbf{y} \in C \tag{2}$$

が成り立つことである。

二次元領域 (図 1) に対して、錐であるか否かを調べる。原点  $O$  を端点とする半直線 (図 1(a)), 複数の半直線から成る領域 (図 1(b)), 原点  $O$  を端点とする二本の半直線に挟まれた領域 (図 1(c), 1(d)) は錐である。一方、三角形 (図 1(e)) は錐ではない。また、半平面 (図 1(f)), 全平面 (図 1(g)) は錐である。錐の内、半直線 (図 1(a)), 二本の半直線に挟まれ劣角に対応する領域 (図 1(c)), 半平面 (図 1(f)), 全平面 (図 1(g)) は凸錐である。複数の半直線から成る領域 (図 1(b)) や二本の半直線に挟まれ優角に対応する領域 (図 1(d)) は凸錐ではない。

三次元凸錐の例を図 2 に示す。図 2(a) に示す凸錐は断面が長円、図 2(b) に示す凸錐は断面が 6 辺形である。図 2(c) に示す凸錐は直線を含む。図 2(d) に示す凸錐は二次元平面内にある。

定ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$  に対して、集合

$$\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\} \triangleq \{\mathbf{x} \mid \mathbf{a}_k^T \mathbf{x} \leq 0, (k = 1, 2, \dots, m)\} \tag{3}$$

を構成する。この集合は凸錐であり、凸錐の face 形式とよぶ。ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$  を、face ベクトルとよぶ。定ベクトル  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l$  に対して、

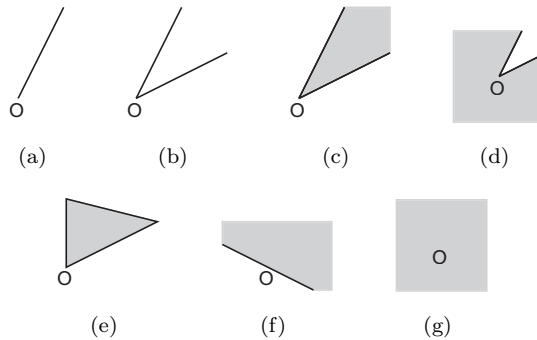


図 1: 二次元領域

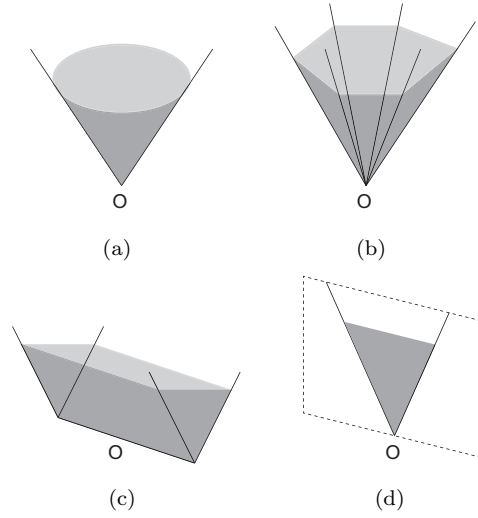


図 2: 三次元凸錐

集合

$$\text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\} \triangleq \left\{ \sum_{i=1}^l c_i \mathbf{u}_i \mid c_1, c_2, \dots, c_l \geq 0 \right\} \quad (4)$$

を構成する。この集合は凸錐であり、凸錐の span 形式とよぶ。ベクトル  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l$  を, span ベクトルとよぶ。

図 3(a) に示すように、平面上に同一直線上にない二つのベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  を定める。このとき、face 形式  $\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$  は、図のグレー部分となる。ベクトル  $\mathbf{a}_1$  に直交し、 $\mathbf{a}_2$  との内積が負となるベクトルを  $\mathbf{u}_1$  とする。同様に、ベクトル  $\mathbf{a}_2$  に直交し、 $\mathbf{a}_1$  との内積が負となるベクトルを  $\mathbf{u}_2$  とする。このとき凸錐は、 $\text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2\}$  と表される。すなわち

$$\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\} = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2\}$$

である。図 3(a) における span ベクトル  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2$  を, face ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  とみなすと、図 3(b) に示す凸錐を得る。この凸錐における span ベクトルは、図 3(a) における face ベクトルで与えられ、上式が成り立つ。

図 3(c) に示すように、一個の face ベクトル  $\mathbf{a}_1$  に対応する凸錐は、 $\mathbf{a}_1$  に直交する直線を含む。直線に含まれるベクトル  $\mathbf{u}_1$  と, face ベクトル  $\mathbf{a}_1$  との内積が負となるベクトル  $\mathbf{u}_2$  を選ぶ。このとき、凸錐は、 $\text{span}\{\mathbf{u}_1, -\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2\}$  と表される。すなわち

$$\text{face}\{\mathbf{a}_1\} = \text{span}\{\mathbf{u}_1, -\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2\}$$

である。図 3(c) における span ベクトルを, face ベクトル  $\mathbf{a}_1, -\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  とみなすと、図 3(d) に示す凸錐を得る。このとき

$$\text{span}\{\mathbf{u}_1\} = \text{face}\{\mathbf{a}_1, -\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$$

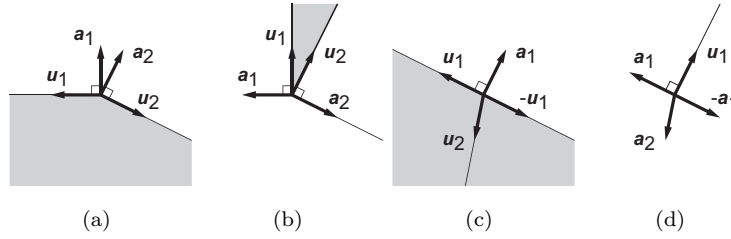


図 3: 二次元凸多面錐の face ベクトルと span ベクトル

と表すことができ, span ベクトル  $\mathbf{u}_1$  は, 図 3(c) における face ベクトル  $\mathbf{a}_1$  で与えられる.

以上のように, 凸錐の face 形式を凸錐の span 形式で表すこと, 逆に凸錐の span 形式を凸錐の face 形式で表すことが可能である. すなわち, face 形式と span 形式は, 同じ集合に対する二つの異なる表現である. 凸錐の face 形式あるいは span 形式で表される集合を, 凸多面錐 (polyhedral convex cone) とよぶ.

図 2 に示す三次元錐の内, 図 2(b), 図 2(c), 図 2(d) に示す凸錐は凸多面錐である. 図 2(b) に示す凸多面錐は, 頂点を通る 6 本の span ベクトルで表される. 図 2(c) に示す凸多面錐は, 二つの面の外向き法線ベクトルが face ベクトルとなる. 図 2(d) に示す凸多面錐は, 頂点を通る 2 本の span ベクトルで表される. 一方, 図 2(a) に示す凸錐は, 凸多面錐ではない.

集合  $X$  に対して, 集合

$$X^* = \{ \mathbf{y} \mid \mathbf{x} \cdot \mathbf{y} \leq 0, \forall \mathbf{x} \in X \} \quad (5)$$

を定義する. 集合  $X^*$  は凸錐であり, 極 (polar) とよぶ. 凸多面錐の極は凸多面錐であり

$$\text{face}\{ \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m \}^* = \text{span}\{ \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m \} \quad (6)$$

$$\text{span}\{ \mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l \}^* = \text{face}\{ \mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l \} \quad (7)$$

が成り立つ. すなわち, 凸多面錐の face 形式と span 形式を入れ替えることで, 極凸多面錐を求めることができる. また, 凸多面錐とその極凸多面錐は, 一対一に対応していることがわかる. 図 3(a), 3(b) に示す二つの凸多面錐は, たがいに極である. また, 図 3(c), 3(d) に示す二つの凸多面錐は, たがいに極である.

## 2 凸多面錐の演算

凸多面錐の演算アルゴリズムを構成する. MATLAB でプログラムを作成することを考慮して, 凸多面錐の face ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$  を列ベクトル

ルとする行列

$$A = \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 & \mathbf{a}_2 & \cdots & \mathbf{a}_m \end{bmatrix} \quad (8)$$

を導入する。このとき、式 (3) は

$$\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\} = \{\mathbf{x} \mid A^T \mathbf{x} \leq \mathbf{0}\} \quad (9)$$

と表すことができる。すなわち、face 形式は、線形同次不等式の解集合である。凸多面錐の span ベクトル  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l$  を列ベクトルとする行列

$$U = \begin{bmatrix} \mathbf{u}_1 & \mathbf{u}_2 & \cdots & \mathbf{u}_l \end{bmatrix} \quad (10)$$

を導入する。このとき、式 (4) は

$$\text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\} = \{U\mathbf{c} \mid \mathbf{c} \geq \mathbf{0}\} \quad (11)$$

と表すことができる。

## 2.1 ベクトルが凸多面錐に含まれるか否かの判定

**ベクトルが凸多面錐の face 形式に含まれるか否かの判定** ベクトル  $\mathbf{x}$  が、凸多面錐  $C = \text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  に含まれるか否かを判定する。すべての face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  に対して、 $\mathbf{a}_k^T \mathbf{x} \leq 0$  が成り立つならば、 $\mathbf{x} \in C$  である。そうでないならば、 $\mathbf{x} \notin C$  と判定することができる。

**ベクトルが凸多面錐の span 形式に含まれるか否かの判定** ベクトル  $\mathbf{x}$  が、凸多面錐  $C = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\}$  に含まれるか否かを判定する。ベクトル  $\mathbf{x}$  が凸多面錐  $C$  に含まれるための条件は

$$\begin{aligned} \exists c_1, c_2, \dots, c_l \geq 0, \\ c_1 \mathbf{u}_1 + c_2 \mathbf{u}_2 + \cdots + c_l \mathbf{u}_l = \mathbf{x} \end{aligned} \quad (12)$$

である。上式を未知数  $c_1, c_2, \dots, c_l$  に関して表すと、線形不等式と線形方程式

$$-\begin{bmatrix} 1 & & & \\ & 1 & & \\ & & \ddots & \\ & & & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_l \end{bmatrix} \leq \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix} \quad (13)$$

$$\begin{bmatrix} \mathbf{u}_1 & \mathbf{u}_2 & \cdots & \mathbf{u}_l \end{bmatrix} \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_l \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \mathbf{x} \end{bmatrix} \quad (14)$$

を得る。上式を満たす  $c_1, c_2, \dots, c_l$  が存在する否かは、線形計画法により判定することができる。MATLAB においては、`linprog` を用いればよい。

## 2.2 凸多面錐の簡単化

凸多面錐  $C = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\}$  において、ベクトル  $\mathbf{u}_k$  が

$$\mathbf{u}_k \in \text{span}\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_{k-1}, \mathbf{u}_{k+1}, \dots, \mathbf{u}_l\} \quad (15)$$

を満たす、すなわち

$$\begin{aligned} \exists c_1, \dots, c_{k-1}, c_{k+1}, \dots, c_l \geq 0, \\ c_1 \mathbf{u}_1 + \dots + c_{k-1} \mathbf{u}_{k-1} + c_{k+1} \mathbf{u}_{k+1} + \dots + c_l \mathbf{u}_l = \mathbf{u}_k \end{aligned} \quad (16)$$

が成り立つならば

$$\text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\} = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_{k-1}, \mathbf{u}_{k+1}, \dots, \mathbf{u}_l\} \quad (17)$$

となる。すなわち、凸多面錐  $C$  の span 形式から、ベクトル  $\mathbf{u}_k$  を除くことができる。この処理を繰り返すことにより、凸多面錐の最も簡単な span 形式を求めることができる。

以上の手続きを **PCC\_simplify** とする。すなわち、凸多面錐の最も簡単な span 形式を求める手続きであり、span ベクトルを列ベクトルとする行列  $U$  を入力として、

$$U_{\text{simplified}} = \text{PCC\_simplify}(U) \quad (18)$$

により最も簡単な span 形式を計算する。返値の行列  $U_{\text{simplified}}$  における列ベクトルは、最も簡単な span 形式の span ベクトルを表す。

凸多面錐  $C = \text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  を簡単化するために、 $C$  の極凸多面錐  $C^* = \text{span}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  を簡単化する。上述の手続きにより、 $C^*$  の最も簡単な span 形式を求めることができる。極凸多面錐  $C^*$  の最も簡単な span 形式は、凸多面錐  $C$  の最も簡単な face 形式に対応する。したがって、face 形式の簡単化においては、face ベクトルを span ベクトルとみなし、上述の手続きを適用すれば良い。すなわち

$$A_{\text{simplified}} = \text{PCC\_simplify}(A) \quad (19)$$

により最も簡単な face 形式を計算することができる。行列  $A_{\text{simplified}}$  における列ベクトルは、最も簡単な face 形式の face ベクトルに対応する。

## 2.3 双方向不等式制約の検出

Face ベクトルが

$$A = \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 & \mathbf{a}_2 & \mathbf{a}_3 & \mathbf{a}_4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$$

で与えられる凸多面錐の span 形式を求めると,  $\text{span}\{[0, 0, -1]^T\}$  を得る. すなわち, 凸多面錐は 1 次元の領域であり, 凸多面錐の次元 1 は空間の次元 3 より小さい. これは, 線形不等式

$$\begin{aligned} \mathbf{a}_1^T \mathbf{x} &= x \leq 0 \\ \mathbf{a}_2^T \mathbf{x} &= y \leq 0 \\ \mathbf{a}_3^T \mathbf{x} &= -x - y \leq 0 \end{aligned}$$

より, 等式制約

$$\begin{aligned} [1, 0, 0]^T \mathbf{x} &= x = 0 \\ [0, 1, 0]^T \mathbf{x} &= y = 0 \end{aligned}$$

が生じているからである. このような不等式制約の組を, 双方向不等式制約とよぶ.

上記の例では,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  に対して

$$\exists c_1, c_2, c_3 > 0, \quad c_1 \mathbf{a}_1 + c_2 \mathbf{a}_2 + c_3 \mathbf{a}_3 = \mathbf{0}$$

が成り立つ. たとえば,  $c_1 = c_2 = c_3 = 1$  とすればよい. 一般に, 双方向不等式制約に含まれる face ベクトルの組を,  $\mathbf{a}_k (k \in I_b)$  と表すと

$$\exists c_k > 0, \quad \sum_{k \in I_b} c_k \mathbf{a}_k = \mathbf{0} \quad (20)$$

が成り立つ.

簡単化された face 形式の face ベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m$  から, 双方向不等式制約を見出すために

$$\begin{aligned} \text{maximize} & \quad c_1 + c_2 + \dots + c_m \\ \text{subject to} & \quad c_1 \mathbf{a}_1 + c_2 \mathbf{a}_2 + \dots + c_m \mathbf{a}_m = \mathbf{0} \end{aligned} \quad (21)$$

$$\begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix} \leq \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_m \end{bmatrix} \leq \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ \vdots \\ 1 \end{bmatrix}$$

を解く. 係数  $c_k$  の値が正ならば, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  は双方向不等式制約に含まれる. 値が 0 であるならば, 双方向不等式制約に含まれない. 上式は, 線形計画法を用いて解くことができる. MATLAB においては, `linprog` を用いればよい.

以上の手続きを `PCC_bidirectional_constraints` とする. すなわち, 双方向不等式制約を見出す手続きであり, face ベクトルを列とする行列  $A$  を入力として

$$[A_b, A_u] = \text{PCC\_bidirectional\_constraints}(A) \quad (22)$$

により，双方向不等式制約に含まれる face ベクトルを列とする行列  $A_b$  と，双方向不等式制約に含まれない face ベクトルを列とする行列  $A_u$  を計算する．

### 3 凸多面錐の変換

#### 3.1 真錐

錐が内点を含み，任意の  $x \in C$  に対して  $-x \notin C$  が成り立つとき，錐は真錐 (proper cone) であると称する．凸錐である真錐を真凸錐 (proper convex cone)，真凸錐である凸多面錐を真凸多面錐 (proper polyhedral convex cone) とよぶ．図 1 に示す凸錐 (図 1(a), 1(c), 1(f), 1(g)) では，図 1(c) に示す凸錐が真凸錐である．図 1(a) に示す凸錐は内点を含まないため，真凸錐ではない．図 1(f), 1(g) に示す凸錐は，線形空間を含んでおり，線形空間内の要素  $x$  とその逆  $-x$  の両方が凸錐に含まれるため，真凸錐ではない．図 2 に示す三次元凸錐では，図 2(a), 2(b) に示す凸錐が真凸錐である．図 2(b) に示す凸錐は，真凸多面錐である．図 2(c) に示す凸錐は線形空間を含んでおり，真凸錐ではない．図 2(d) に示す凸錐は内点を含まないため，真凸錐ではない．

凸多面錐  $C$  の face 形式  $\text{face}\{a_1, a_2, \dots, a_m\}$  の次元を  $n$  で表す．Face 形式は簡単化されており，冗長な face ベクトルを含まないとする．個数  $m$  が次元  $n$  より小さいとき，凸多面錐  $C$  は  $n - m$  次の線形空間を含んでおり，真錐ではない．真錐であるためには， $n \leq m$  である必要がある．また，双方向不等式制約となる face ベクトルの組があるとき，凸多面錐  $C$  の次元は  $n$  より小さく， $C$  は内点を持たないため， $C$  は真錐ではない．結局，真凸多面錐であるためには， $m \geq n$  ならびに双方向不等式制約を持たないことが必要である．

真凸多面錐の face ベクトル  $a_1, a_2, \dots, a_m$  から，任意の  $k (\leq n)$  個を選び，その  $k$  個のベクトルから成る行列のランクを調べる．フルランクでない場合は， $a_1, a_2, \dots, a_m$  が一次独立でなく，いずれかの face ベクトルが冗長である，あるいは双方向不等式制約を含むかである．これは，簡単化された真凸多面錐では生じない．したがって，真凸多面錐であるためには，face ベクトルの中から  $k (\leq n)$  個を選ぶとき，選んだ face ベクトルを列とする行列のランクが  $k$  に等しくなくてはならないことがわかる．

簡単化された真凸多面錐において，face ベクトルの個数と span ベクトルの個数を調べる．Face ベクトルを列とする行列  $A$  と span ベクトルを列とする行列  $U$  に対して， $A^T U$  を計算し，各要素が 0 であるか負であるかを調べる．3 次元空間で 5 個の face ベクトルから成る真凸多面錐  $C$  が，5 個の span



ベクトルを有する場合，積  $A^T U$  はたとえば

$$A^T U = \begin{bmatrix} 0 & & & & 0 \\ 0 & 0 & & & \\ & 0 & 0 & & \\ & & & 0 & 0 \\ & & & & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

と表される．ここで負の要素は示していない．各 span ベクトルは，2 個の face ベクトルから決められる．したがって，積の各列には，2 個の 0 要素がある．Face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  が定める 2 次元空間  $\mathbf{a}_k^T \mathbf{x} = 0$  と，真凸多面錐  $C$  との共通集合は，2 次元空間内の真凸多面錐になる．この 2 次元空間内の真凸多面錐は，2 個の span ベクトルで指定される．したがって，積の各行には，2 個の 0 要素がある．一方，3 次元空間で 5 個の face ベクトルから成る真凸多面錐が，4 個の span ベクトルを有する場合，積  $A^T U$  はたとえば

$$\begin{bmatrix} 0 & & & & & \\ 0 & 0 & & & & \\ & 0 & 0 & & & \\ & & & 0 & 0 & \\ & & & & 0 & \\ & & & & & 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 & & & & 0 \\ 0 & 0 & & & \\ & 0 & 0 & & \\ & & & 0 & 0 \\ & & & & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

となる．左の場合は，face ベクトル  $\mathbf{a}_1$  が定める平面と真凸多面錐  $C$  との共通集合が，2 次元真凸多面錐ではないことを意味する．右の場合は，face ベクトル  $\mathbf{a}_5$  が冗長であることを意味する．いずれの場合も， $C$  が簡単化された真凸多面錐であるという仮定に反する．したがって，face ベクトルの個数と span ベクトルの個数は等しい．4 次元空間で 6 個の face ベクトルから成る真凸多面錐  $C$  が，6 個の span ベクトルを有する場合，各 span ベクトルは，3 個の face ベクトルから決められる．また，face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  が定める 3 次元空間と，真凸多面錐  $C$  との共通集合は，3 次元空間内の真凸多面錐であり，3 個の span ベクトルで指定される．したがって，積  $A^T U$  では，各行，各列に 3 個の 0 要素がある．たとえば，

$$A^T U = \begin{bmatrix} 0 & & & & 0 & 0 \\ 0 & 0 & & & & 0 \\ 0 & 0 & 0 & & & \\ & 0 & 0 & 0 & & \\ & & & 0 & 0 & 0 \\ & & & & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

となる．列の個数が 6 より小さい場合，このようにはならない．したがって，face ベクトルの個数と span ベクトルの個数は等しい．以上の考察より，簡単化された真凸多面錐においては，face ベクトルの個数と span ベクトルの個数は等しいことがわかる．

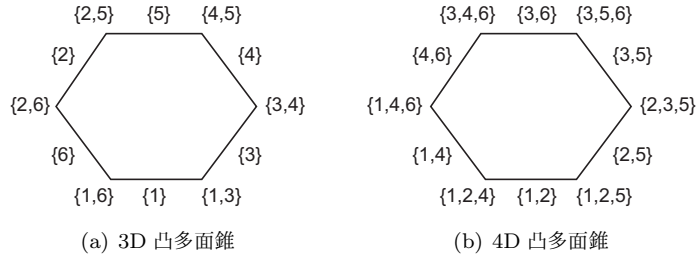


図 4: 真凸多面錐の断面

真凸多面錐においては， $n$  個の face ベクトルから成る行列のランクは  $n$ ， $n - 1$  個の face ベクトルから成る行列のランクは  $n - 1$ ， $n - 2$  個の face ベクトルから成る行列のランクは  $n - 2$  である．すなわち， $n$  個の face ベクトルから成る行列の零空間の次元は  $0$ ， $n - 1$  個の face ベクトルから成る行列の零空間は一次元空間（直線）， $n - 2$  個の face ベクトルから成る行列の零空間は二次元空間（平面）である．したがって，span ベクトルを含む直線は， $n - 1$  個の face ベクトルから成る行列の零空間である．二つの span ベクトルを含む平面は， $n - 2$  個の face ベクトルから成る行列の零空間である．例として，3次元真凸多面錐  $C = \text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_6\}$  を考える．真凸多面錐  $C$  を平面で切断し，一次元空間を点，二次元空間を直線で表す（図 4(a)）．Span ベクトルを含む直線は，二個の face ベクトルから成る行列の零空間である．二個の face ベクトルの添字を，集合で表す．二つの span ベクトルを含む平面は，両端の直線に対応する集合の共通集合で与えられる．たとえば， $\{1, 3\}$  で指定される直線と  $\{3, 4\}$  で指定される直線を含む平面は， $\{1, 3\} \cap \{3, 4\} = \{3\}$  で与えられる．別の例として，4次元真凸多面錐  $C = \text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_6\}$  を考える．真凸多面錐  $C$  を平面で切断し，一次元空間を点，二次元空間を直線で表す（図 4(b)）．Span ベクトルを含む直線は，三個の face ベクトルから成る行列の零空間である．二つの span ベクトルを含む平面は，両端の直線に対応する集合の共通集合で与えられる．たとえば， $\{1, 2, 5\}$  で指定される直線と  $\{2, 3, 5\}$  で指定される直線を含む平面は， $\{1, 2, 5\} \cap \{2, 3, 5\} = \{2, 5\}$  で与えられる．

### 3.2 真凸多面錐の face 形式から span 形式への変換

真凸多面錐  $C$  の face 形式  $\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  から span 形式を求める．凸多面錐の span 形式を，行列  $U$  で表す．まず，行列  $U$  は空とする．凸多面錐の span ベクトルを，順次  $U$  に追加する．凸多面錐の次元を  $n$  で表す．真錐であるので， $n \leq m$  が成り立つ．凸多面錐の face ベクトルから  $n$  個のベクトル  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$  を取り出す．このとき，行列

$$\hat{A} = \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 & \mathbf{a}_2 & \cdots & \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

は正則であり,  $\text{rank } \hat{A} = n$  が成り立つ. 行列  $\hat{A}$  の第  $k$  列を取り除いた行列を  $\hat{A}_k$  で表す. すなわち

$$\hat{A}_k = \begin{bmatrix} \mathbf{a}_1 & \cdots & \mathbf{a}_{k-1} & \mathbf{a}_{k+1} \cdots & \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

である. このとき,  $\text{rank } \hat{A}_k = n - 1$  であり, 行列  $\hat{A}_k$  の零空間は直線となる. 行列  $\hat{A}_k$  の零空間に含まれる基底ベクトル  $\mathbf{d}_k$  を一つ見出し,  $\mathbf{a}_k^T \mathbf{d}_k \leq 0$  ならばベクトル  $\mathbf{d}_k$  を  $U$  に,  $\mathbf{a}_k^T \mathbf{d}_k > 0$  ならばベクトル  $-\mathbf{d}_k$  を  $U$  に追加する. 追加したベクトルは, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  との内積が負, それ以外の face ベクトルとの内積が 0 である. ここで, 追加した span ベクトルに対して, 内積が 0 となる face ベクトルの添え字の集合を記録する. すなわち, 追加したベクトルに対応して, 集合  $I_k = \{1, \dots, k-1, k+1, \dots, n\}$  を記録する. 以上の過程を  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$  に対して実行することにより,  $n$  個の span ベクトルを得る.

次に, face ベクトル  $\mathbf{a}_{n+1}, \dots, \mathbf{a}_m$  を, 得られた凸多面錐に順次適用することで, 凸多面錐を逐次的に更新する. 真凸多面錐の span ベクトルの個数は  $n$  に等しい. したがって, face ベクトルを一個追加するたびに, span ベクトルは一個増える. したがって, 凸多面錐の face ベクトル  $\mathbf{a}_k$ , ( $k \in \{n+1, \dots, m\}$ ) を追加する直前, 凸多面錐は  $k-1$  個の span ベクトルを有している. この凸多面錐を

$$C_{k-1} = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_{k-1}\}$$

と表す. ここで, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  を追加することにより, 1 個の span ベクトルが  $C_{k-1}$  から外れ, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  の追加により生じる 2 個の span ベクトルが  $C_{k-1}$  に加わる. したがって, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  を追加することにより,  $k$  個の span ベクトルから成る真凸多面錐  $C_k$  を得る. この過程の詳細を記す. まず,  $\mathbf{a}_k$  と  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_{k-1}$  との内積を計算し, 内積が正となる span ベクトル  $\mathbf{u}_j$  を見出す. このような span ベクトルは 1 個だけある. Span ベクトル  $\mathbf{u}_j$  と  $\mathbf{u}_{j-1}$  の間, ならびに  $\mathbf{u}_j$  と  $\mathbf{u}_{j+1}$  の間に新しい span ベクトルを生成する. Span ベクトル  $\mathbf{u}_j$  と  $\mathbf{u}_{j-1}$  の間の span ベクトル  $\mathbf{u}^-$  は, face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  ならびに  $\mathbf{u}_j$  と  $\mathbf{u}_{j-1}$  を含む 2 次元面を定める face ベクトルに直交する. このような face ベクトルの集合は,  $I^- = \{k\} + I_j \cap I_{j-1}$  で与えられる. 添字集合  $I^-$  に対応する face ベクトルから成る行列の零空間を求め, 零空間に含まれる基底ベクトル  $\mathbf{d}^-$  を一つ見出す. 集合  $I^-$  以外の要素に対応する face ベクトルと  $\mathbf{d}^-$  との内積がすべて負または 0 ならば  $\mathbf{u}^- = \mathbf{d}_k$ , 内積がすべて正ならば  $\mathbf{u}^- = -\mathbf{d}_k$  とする. 同様に, Span ベクトル  $\mathbf{u}_j$  と  $\mathbf{u}_{j+1}$  の間の span ベクトル  $\mathbf{u}^+$  を, 添字集合  $I^+ = \{k\} + I_j \cap I_{j+1}$  から求める. Span ベクトル  $\mathbf{u}_j$  を外し,  $\mathbf{u}^-, \mathbf{u}^+$  を追加し, span 形式を更新する. すなわち

$$C_k = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_{j-1}, \mathbf{u}^-, \mathbf{u}^+, \mathbf{u}_{j+1}, \dots, \mathbf{u}_{k-1}\}$$

となる。なお、 $j = 1$  のときは  $j - 1$  を  $k - 1$  で、 $j = k - 1$  のときは  $j + 1$  を  $1$  で置き換えて計算を進める。以上の操作を、face ベクトル  $\mathbf{a}_{n+1}, \dots, \mathbf{a}_m$  に適用することにより、凸多面錐を順次更新し、最終的な span 形式を得ることができる。

以上の手続きを `PCC_convert_proper_cone` とする。すなわち、真凸多面錐の face 形式から span 形式を計算する手続きであり、face ベクトルを列ベクトルとする行列  $A$  を入力として、

$$U = \text{PCC\_convert\_proper\_cone}(A) \quad (23)$$

により、span 形式を計算する。返値の行列  $U$  における列ベクトルは、span 形式の span ベクトルを表す。

例 自然数  $m (\geq 3)$  と  $z \neq 0$  に対して、 $\theta_k = 2\pi k/m$  と定め、face ベクトル  $[\cos \theta_k, \sin \theta_k, z]^T$ , ( $k = 1, 2, \dots, m$ ) から成る凸多面錐を考える。これは、3次元空間内の  $m$  角錐となり、真凸多面錐である。ここで、 $m = 8$ ,  $z = -1$  とすると、face ベクトルは

$$A = \begin{bmatrix} 1.00 & 0.71 & 0.00 & -0.71 & -1.00 & -0.71 & -0.00 & 0.71 \\ 0.00 & 0.71 & 1.00 & 0.71 & 0.00 & -0.71 & -1.00 & -0.71 \\ -1.00 & -1.00 & -1.00 & -1.00 & -1.00 & -1.00 & -1.00 & -1.00 \end{bmatrix}$$

となる。手続き `PCC_convert_proper_cone` を用いて、span 形式を計算すると

$$U = \begin{bmatrix} 0.28 & -0.28 & -0.68 & -0.68 & -0.28 & 0.28 & 0.68 & 0.68 \\ 0.68 & 0.68 & 0.28 & -0.28 & -0.68 & -0.68 & -0.28 & 0.28 \\ 0.68 & 0.68 & 0.68 & 0.68 & 0.68 & 0.68 & 0.68 & 0.68 \end{bmatrix}$$

を得る。このとき、 $A^T U$  は

$$\begin{bmatrix} -0.40 & -0.96 & -1.36 & -1.36 & -0.96 & -0.40 & 0 & 0 \\ 0 & -0.40 & -0.96 & -1.36 & -1.36 & -0.96 & -0.40 & 0 \\ 0 & 0 & -0.40 & -0.96 & -1.36 & -1.36 & -0.96 & -0.40 \\ -0.40 & 0 & 0 & -0.40 & -0.96 & -1.36 & -1.36 & -0.96 \\ -0.96 & -0.40 & 0 & 0 & -0.40 & -0.96 & -1.36 & -1.36 \\ -1.36 & -0.96 & -0.40 & 0 & 0 & -0.40 & -0.96 & -1.36 \\ -1.36 & -1.36 & -0.96 & -0.40 & 0 & 0 & -0.40 & -0.96 \\ -0.96 & -1.36 & -1.36 & -0.96 & -0.40 & 0 & 0 & -0.40 \end{bmatrix}$$

となり、各列、各行に、要素  $0$  が  $2$  個あることがわかる。

### 3.3 凸多面錐の変換アルゴリズム

凸多面錐  $C$  の face 形式から span 形式へ変換する。凸多面錐  $C$  は真錐とは限らない。行列  $A$  で face 形式を表す。まず、双方向不等式制約に対応する

行列  $A_b$  を求める。行列  $A_b$  が空でない場合は、双方向不等式制約に含まれない face ベクトル (行列  $A_u$  で与えられる) を、行列  $A_b$  の零空間に射影する。零空間内の凸多面錐は真錐であるので、`PCC_convert_proper_cone` を用いて span 形式を求める。求めた零空間における span ベクトルを、原空間で表すことにより、凸多面錐  $C$  の span 形式を求めることができる。

行列  $A_b$  が空である場合、凸多面錐  $C$  の次元は空間の次元に一致する。ただし、凸多面錐  $C$  が線形空間を含む可能性があるため、行列  $A$  の零空間とその直交補空間を求める。Face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  は、直交補空間に含まれるので、直交補空間に射影する。直交補空間内の凸多面錐は真錐であるので、`PCC_convert_proper_cone` を用いて span 形式を求める。求めた直交補空間における span ベクトルを原空間で表すとともに、零空間を表す span ベクトルを求めることにより、凸多面錐  $C$  の span 形式を求めることができる。

以上に示すように、face ベクトルを部分空間に射影し、部分空間内で真凸多面錐の face 形式から span 形式へ変換し、部分空間における span ベクトルを原空間で表すという計算が必要である。この計算過程を示す。凸多面錐  $C$  の face 形式が  $\text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  で与えられるとする。部分空間の正規直交基底を  $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_q$  とする。行列

$$B = \begin{bmatrix} \mathbf{b}_1 & \mathbf{b}_2 & \dots & \mathbf{b}_q \end{bmatrix} \quad (24)$$

を用いると、部分空間における face ベクトル  $\mathbf{a}_k$  の座標は、 $\boldsymbol{\alpha}_k = (\mathbf{a}_k^T B)^T$  で表される。部分空間内のベクトル  $\boldsymbol{\alpha}_1, \boldsymbol{\alpha}_2, \dots, \boldsymbol{\alpha}_m$  から構成される face 形式

$$\hat{C} = \text{face}\{\boldsymbol{\alpha}_1, \boldsymbol{\alpha}_2, \dots, \boldsymbol{\alpha}_m\} \quad (25)$$

に対して、アルゴリズム `PCC_convert_proper_cone` を適用し、span 形式を求める。

$$\hat{C} = \text{span}\{\boldsymbol{\beta}_1, \boldsymbol{\beta}_2, \dots, \boldsymbol{\beta}_m\} \quad (26)$$

ベクトル  $\boldsymbol{\beta}_j$  を原空間で表すと、 $\mathbf{v}_j = B\boldsymbol{\beta}_j$  となる。したがって、原空間で span 形式は

$$\text{span}\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_m\} \quad (27)$$

で与えられる。

最後に、零空間を表す span ベクトルを求める。ベクトル  $\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \dots, \mathbf{e}_p$  から成る線形空間は

$$\text{span}\{\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_p, \mathbf{e}^-\} \quad (28)$$

ここで

$$\mathbf{e}^- = -\sum_{i=1}^p \mathbf{e}_i \quad (29)$$

と表すことができる。

以上の手続きを `PCC_convert` とする。すなわち，凸多面錐の face 形式から span 形式を計算する手続きであり，face ベクトルを列ベクトルとする行列  $A$  を入力として，

$$U = \text{PCC\_convert}(A) \quad (30)$$

により，span 形式を計算する。返値の行列  $U$  における列ベクトルは，span 形式の span ベクトルを表す。また，極凸多面錐を考えることにより，凸多面錐の span 形式から face 形式への変換は

$$A = \text{PCC\_convert}(U) \quad (31)$$

となる。

## 4 連立一次不等式

連立一次不等式

$$A^T \mathbf{x} + \mathbf{b} \leq \mathbf{0} \quad (32)$$

を凸多面錐のアルゴリズムを用いて解く。

まず，ベクトル  $\mathbf{x}$  を，同次ベクトル

$$\mathbf{X} = \begin{bmatrix} \bar{\mathbf{x}} \\ \lambda \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \lambda \mathbf{x} \\ \lambda \end{bmatrix} \quad (33)$$

で表す。ここで， $\lambda$  は非負の実数である。なお，同次ベクトル

$$\begin{bmatrix} \bar{\mathbf{x}} \\ 0 \end{bmatrix} \quad (34)$$

は， $\bar{\mathbf{x}}$  方向の無限遠点を表す。式 (32) は

$$\begin{bmatrix} A^T & \mathbf{b} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \bar{\mathbf{x}} \\ \lambda \end{bmatrix} \leq \mathbf{0} \quad (35)$$
$$-\lambda \leq 0$$

となる。行列

$$\bar{A} = \begin{bmatrix} A & \mathbf{0} \\ \mathbf{b}^T & -1 \end{bmatrix} \quad (36)$$

を導入すると，連立一次不等式 (35) は

$$\bar{A}^T \mathbf{X} \leq \mathbf{0} \quad (37)$$

と表される。上式は、凸多面錐の face 形式である。そこで、face 形式を span 形式に変換する。

$$\bar{U} = \text{PCC\_convert}(\bar{A}) \quad (38)$$

行列  $\bar{U}$  の各列は、span ベクトルであり、同次ベクトルで表されている。制約  $\lambda \geq 0$  が課せられているので、行列  $\bar{U}$  の各列の最後の要素は正または 0 である。列の最後の要素が正の場合、その列を最後の要素で割ることにより、元の空間のベクトルを得る。最後の要素が 0 に等しい場合は、無限遠点に対応する。最後の要素が 1 に等しい列を左側に、最後の要素が 0 に等しい列を右側にまとめると

$$\bar{U} = \left[ \begin{array}{cccccc} \mathbf{u}_1 & \cdots & \mathbf{u}_l & \mathbf{v}_1 & \cdots & \mathbf{v}_p \\ 1 & \cdots & 1 & 0 & \cdots & 0 \end{array} \right] \quad (39)$$

を得る。上式の span 形式は

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^l c_i \mathbf{u}_i + \sum_{j=1}^p d_j \mathbf{v}_j \quad (40)$$

$$\sum_{i=1}^l c_i = 1 \quad (41)$$

$$c_1, c_2, \dots, c_l \geq 0, \quad d_1, d_2, \dots, d_p \geq 0 \quad (42)$$

と書き直すことができる。集合

$$\left\{ \sum_{i=1}^l c_i \mathbf{u}_i \mid \sum_{i=1}^l c_i = 1 \right\} \quad (43)$$

は、ベクトル  $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l$  を頂点とする多角形領域である。この領域を  $\text{span}\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_p\}$  方向に掃引すると、解領域となる。

例 連立一次不等式

$$\begin{aligned} -x - 2 &\leq 0 \\ -x - y - 2 &\leq 0 \\ -y - 2 &\leq 0 \end{aligned}$$

を解く。このとき

$$\bar{A} = \left[ \begin{array}{ccc|c} -1 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & -1 & 0 \\ -2 & -2 & -2 & -1 \end{array} \right]$$

である。Face 形式から span 形式へ変換すると

$$\bar{U} = \begin{bmatrix} 0.0000 & 1.0000 & 0.0000 & -2.0000 \\ -2.0000 & -0.0000 & 1.0000 & -0.0000 \\ 1.0000 & 0.0000 & -0.0000 & 1.0000 \end{bmatrix}$$

を得る。したがって、線形同次不等式の一般解は

$$\begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = c_1 \begin{bmatrix} 0 \\ -2 \end{bmatrix} + c_2 \begin{bmatrix} -2 \\ 0 \end{bmatrix} + d_1 \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} + d_2 \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$c_1 + c_2 = 1, \quad c_1, c_2, d_1, d_2 \geq 0$$

と表される。解領域は、 $[-2, 0]^T$  と  $[0, -2]^T$  を頂点とする線分を、 $\text{span}\{[1, 0]^T, [0, 1]^T\}$  方向に掃引して得られる。結果として、解領域は、 $[-2, \infty]^T$ ,  $[-2, 0]^T$ ,  $[0, -2]^T$ ,  $[\infty, -2]^T$  を結ぶ線分を境界とする凸領域で与えられる。

## 問題

1. 集合  $C$  が凸錐であるための必要十分条件が式 (2) で表されることを示せ。
2. 式 (3) で与えられる face 形式が凸錐であることを示せ。
3. 式 (4) で与えられる span 形式が凸錐であることを示せ。
4. 任意の集合  $X$  に対して、式 (5) で与えられる  $X^*$  が凸錐であることを示せ。
5. (a) 任意の集合  $X$  に対して、 $X \subset (X^*)^*$  が成り立つことを示せ。  
(b) 任意の集合  $X, Y$  に対して、 $X \subset Y$  ならば  $X^* \supset Y^*$  が成り立つことを示せ。
6. 凸錐  $C$  に対して  $(C^*)^* = C$  が成り立つことを、以下の分離定理 [1] を用いて示せ。

分離定理 凸錐  $C$  と  $y \notin C$  に対して

$$\mathbf{p} \cdot \mathbf{x} \leq 0, \quad \forall \mathbf{x} \in C$$

$$\mathbf{p} \cdot \mathbf{y} > 0$$

を満たす  $\mathbf{p}$  が存在する。

7. (a) 極凸多面錐に関する式 (7) を示せ。  
(b) 凸錐  $C$  に対して  $(C^*)^* = C$  が成り立つことを用いて、式 (6) を示せ。



8. (a) 凸多面錐  $C = \text{span}\{\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_l\}$  が線形空間であるための必要十分条件は

$$\exists c_1, c_2, \dots, c_l > 0, \quad \sum_{j=1}^l c_j \mathbf{u}_j = \mathbf{0}$$

であることを示せ.

- (b) 凸多面錐  $C = \text{face}\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_m\}$  が線形空間であるための必要十分条件は

$$\exists c_1, c_2, \dots, c_m > 0, \quad \sum_{k=1}^m c_k \mathbf{a}_k = \mathbf{0}$$

であることを示せ.

## 参考文献

- [1] 布川, 中山, 谷野, 線形代数と凸解析, コロナ社, 1991